

これからのリスニング指導のあり方

熊井信弘

1. はじめに

近年、コミュニケーション能力の育成がますます求められるようになり、音声面の学習、とりわけリスニングの重要性が改めて認識されてきている。実際のコミュニケーションの場面では、英語が聞きとれなければ相手の言っていることが理解できないだけでなく、状況に応じて自分の意図を正しく相手に伝えることができない。最近の言語習得理論によれば、リスニングは単に受身的な技能ではなく、他の技能と同じく意味解釈に能動的にかかわるダイナミックな言語活動であり、その技能の養成はそのまま言語能力の習得につながると考えられている。こうしたことから、新学習指導要領においても「聞くこと」に重点を置き、生徒のリスニング能力を高めようとしている。中学校新学習指導要領では、1993年度より「聞くこと」が1つの独立した技能として扱われるようになり、教科書の中においても、他の技能とともにリスニングの指導にも重点が置かれることになった。また、1994年度より実施される高等学校新学習指導要領では、とくに「オーラル・コミュニケーションB」という新設科目において、『話し手の意向などを聞き取る能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる』というように、リスニング主体の言語活動が中心に行われる。このように中学校ではもちろんのこと、高等学校においてもリスニングの技能が重視されてきており、コミュニケーションのためのリスニング能力をいかに身につけさせるかが大きな課題となってきている。

それではコミュニケーションに役立つようなリスニングの能力を育成

するためには、どのような教材を使いどのような指導法で行えばよいのであろうか。本稿ではまず、従来のリスニング教材とその指導法を再検討し、そのあとで望ましいリスニング指導のありかたについて考えていく。

2. 従来のリスニング教材およびその指導の問題点

従来のリスニング教材では、音の違いを聞き分け区別するような音素識別練習をしたり、ある程度の長さの英文をテープで聞いたあとで、その内容に関する文がいくつか読まれ、内容について正誤判定をしたり質問に対して答える、などのような形式が多かったように思われる。しかしながら、このような形式には次のような問題点がある。たとえば音素識別の練習は単語を聞き分ける上で大切であるが、音の識別ができることと英語を聞いてその内容を理解することとの間には必ずしも相関関係があるとはいえないことがわかっている。また、長文を聞いて質問に答えるというような問題形式では、学習者は何の準備もなしにすぐに長い文を聞くことになり、心理的不安が増え、一語でもわからないと全部わからないと思ってあきらめてしまいがちである。また、後で質問に答える形式を取っているために、話の内容をまんべんなく聞いて記憶しておかねばならず、一語一語にこだわって聞いてしまい、結局その概要がつかめないうことになりかねない。さらに、ここで行われる「リスニング指導」も、テープを聞かせたあとで解答をチェックし、正答を提示するだけの単なるテストにすぎない。このような授業方法ではたまたま聞きとれた生徒はいいが、聞き取れなかった生徒は永遠に聞き取れないままという状態になってしまう。したがって従来の教材や指導方法では本来あるべき「リスニングの指導」は行われていないと言っていいであろう。

3. タスク形式のリスニング教材

「聞くこと」は学習者の内部で行われるために、表にあらわれにくい性質のものである。このため、その活動を外在化する必要がある。そこで、何を聞き取ったらよいのかについて、学習者にまえてタスク(課題)を与えておき、それができたかどうかによって理解度を判定するような手だてを考えるのがよいと思われる。ここではこの方法を「タスク形式のリスニング指導」と呼ぶことにする。

タスク形式のリスニング指導では、まず最初に学習者に遂行すべきタスクを与え、英語の談話を聞きながら、さまざまな情報の中からそのタスクを行うのに必要な情報を選び出させたり、その結果として何らかの行動をとらせたりするものである。

具体的には、問題文を聞かせる前に質問を与えたり、どういうものを聞くのかについてある程度の情報を学習者に与えて、目的を明確に設定するとともに、聞くことへの動機づけと積極性を高める。問題は絵や図を見て談話を聞きながらタスクを行うので、記憶力テストのようなものにはならなくなる。また、答えにはフルセンテンスを要求せず、リーディングやライティングの要素をあまり介在させないで解答できるように、選択肢の中から記号や絵を選ばせたり表を完成させたりする形式をとっている。また、従来の形式のように、単文の形や意味が理解できているかどうかというレベルにとどまらず、ある文脈なり状況の中でことばによって伝えられるメッセージや意味が理解できる能力を養成しようとしている。

4. リスニング指導の基本的な考え方

タスク形式のリスニング指導を行っても、これまでのように教師がテープを流し、生徒に問題を答えさせそれをチェックするだけでは、単なるリスニングテストになってしまい、従来の指導法と何らかわりのない。

これでは教師は単なるテープレコーダーのボタン押しと化し、生徒が間違ったとき適切な指導ができず、結局生徒のリスニング能力は思うように伸びないということになってしまう。

そこでリスニングの指導では、単なるリスニングテストで終わらせないために、聞く前の活動 (Pre-listening activities)、聞いている時の活動 (While-listening activities)、聞いたあとの活動 (Post-listening activities) の各段階で適切な指導が必要となる。

Pre-listening の活動では、聞くことへの意欲を高めるとともに、言語材料をインプットしたり、トピックに関連したことを話題にし、それによって学習者がすでにもっている背景的知識 (スキーマ) を引き出してそれを活性化させたり、聞くべき内容を予測させたりしてそれらをリスニングに役立てる。

Pre-listening の活動

- ・リスニングへの意欲を高めるとともに、英語を聞くことに対する不安を解消させ、生徒の情緒フィルターを下げる
- ・背景的知識(スキーマ)を活性化させる
- ・語い・文型を復習、導入する
- ・談話の流れについて事前情報を与える
- ・内容について予測させる

While-listening ではタスクを与えることによって、聞き取るべきポイントをしぼらせ、問題解決を行わせる。

While-listening の活動

- ・タスクによる問題解決をさせる

Post-listening では理解度のチェックを行うが、単なる答え合わせに終わらせずに、学習者がどこでどうしてつまづいたのかを発見させるなど、適切なフィードバックを与えることが必要である。また、ある程度聞き取れたら聞き取った内容をもとにして要約を書かせるライティングの活動や、聞きながらメモをとって、それをもとに発表させるスピーキングの活動にも発展させることが考えられる。

Post-listening の活動

- ・理解度のチェックを行う
- ・適切なフィードバックを与える（誤りの原因を発見しその治療を行う）
- ・発展的活動（ライティング・スピーキング）を行う

5. リスニング指導の実際

それではこれまで述べてきたことが、実際の授業でどのように扱われるのか具体的にみていく。ここでは中学校の段階での活動を取りあげる。

《活動》対話を聞きながら欠けている情報を集める

ここでは対話を聞きながら、聞き取った情報をワークシートに記入するタスクを行なう。





Pre-listening activity

すぐに対話を聞かせタスクを行わせるのではなく、トピックについて教師が話したり、生徒に質問したりして、生徒がすでにもっている背景的知識（スキーマ）を活性化させたり、タスクを行うのに必要と思われる語いを復習・導入したり、聞き取りに対する不安を解消させたりするための活動を行なう。ここでは動物が話題なので、動物の鳴き声を AET

にまねてもらい、どんな動物かを生徒に当てさせる。このようなクイズ的な活動によって、生徒の活動への動機づけも高めることができる。

While-listening activity

生徒に下のようなワークシートを配る。教師（あるいはテープ）の対話を聞いて、それぞれの話し手が好きな動物には○を、嫌いな動物には×をワークシートに記入するように言う。

ワークシート		石丸先生と Mr. Peck はどんな動物が好きですか。 二人の会話を聞いて下の表にしるしをつけましょう。 (好き=○ きらい=×)			
		 cats	 pigs	 dogs	 snakes
石丸先生					
Mr. Peck					

タスクを始める前に次のことによく注意しておく。

- (1) 生徒が何を聞くことになっているか (what to listen to) を十分理解しているかどうか。
- (2) 生徒はテープを聞いて何をすることになっているか (what to do while listening) を十分理解しているかどうか。

以上の2点をよく理解させたうえで対話を聞かせるのがよいであろう。また、教師は実際にタスクをやらせる前に、ワークシートを見る時間を十分に生徒に与えておくことが大切である。また、どんな話になりそうか、話がどう発展していくか予測させるとよい。こうした予測は実際の

コミュニケーションの場面のリスニングでも行っていることである。

《スクリプト》

AET: Ms. Ishimaru?

JTE: Yes?

AET: Do you like cats?

JTE: Cats? Yes, I do. I like cats very much. How about you, Mr. Peck? Do you like cats?

AET: No, I don't. I don't like cats. I like dogs. I like dogs very much.

JTE: Do you like snakes?

AET: Snakes? No, I don't like snakes. How about pigs? Do you like pigs?

JTE: No, I don't. I don't like pigs.

Post-listening activity

タスクをやり終えたら、すぐに生徒の理解度をチェックし、生徒の活動を評価する。こうしたチェックはテストではなく授業の中での自己診断のひとつであるから、もし生徒が間違った場合、どこをどうして間違ったのかを発見させ、適切な治療を施すことが大切である。解答のチェックのし方は、基本的には次のような方法が考えられる。

(1)生徒を指名して、口頭であるいは板書させて解答を発表させる。生徒から正しい答えが得られなかった場合には、複数の生徒に尋ねたり、クラス全体に尋ねてみるとよい。そして、どうして答えが間違ってしまったのかについて教師はよく把握し、適切な治療を施したりそれをクラス全体にフィードバックさせることが大切である。

(2)生徒にペアを組ませ、ペアごとに答えを比較させる。わからなかつ

たところや問題点などがあれば、それがどこかをはっきりさせる。この間、教師は机間巡視をして適切な助言・指導を行う。そのあと、どの答えが正しいかディスカッションをしたあと、もう1度対話を聞いて答えを確かめる。

解答をチェックした後、正しい答えが確認できるように、あるいは、最初に聞きとれなかったところを聞かせるため、もう1回（必要なら2回）対話を聞かせる。教材が生徒の実態に合わなかったり難しすぎた場合には、対話の台本（トランスクリプション）を生徒に与えて何度か聞かせてもよい。

また、こうした活動では、活動をやりっぱなしにしないで、最後のところで何らかの形で生徒の成果について評価することが大切である。例えば最後に生徒に手を挙げさせて、理解しているかどうかを教師がチェックすると同時に、生徒の活動を評価することなどが考えられる。

6. リスニング能力を高めるためのその他の方策

これまで実際の授業を中心にリスニング指導のあり方について述べてきた。ここではリスニングの指導をする際、他に考慮すべき事柄について述べる。

(1)「おおまかな聞き取り」と「こまかい聞き取り」の両方を指導する

リスニングの能力を伸ばすためには、これまでみてきたように話の概要をおおまかに理解する「おおまかな聞き取り」の練習や、必要な情報だけを聞き取るような「選択的聞き取り」の練習の他に、細かい部分も聞きとれるような能力を養う練習も必要である。たとえば、ストレス(強勢)やイントネーション(抑揚)を聞き分けたり、短縮形や弱形、同化、連結現象などを含む文を聞き、ディクテーションをすることによって、英語特有の音声変化に慣れさせるような練習も必要であろう。

(2)リスニングは他の技能と結びつけて指導する

リスニングの技能は独立して存在するのではなく、他の技能、特にスピーキングやライティングなどと結びつけて、オールラウンドな形で英語の力を身につけさせることが望ましいといえる。したがってリスニングの授業だからといって、聞き取りの練習ばかりさせては片手落ちであろう。教材を中心に教師が生徒とインターアクティブにコミュニケーションしながら授業をすすめることによって、それまで身につけたリスニングの技能を生かすことができるようになるのである。

(3) 英語による学習の展開を行う

ふだんの授業で教師が英語をあまり使わないでリスニング教材をテープで流し、生徒の解答をチェックするだけでは効果的なリスニングの指導はできない。生徒の実態に合わせて表現の難易や英語のスピードなどを変えながら、そして必要なら表情や身振りなどのパラ言語を使いながら、理解できるインプットを提供できる教師の英語こそが、生徒にとって最適なリスニングインプットとなる。したがって教師はふだんからできるだけクラスルーム・イングリッシュを使って授業を行うことが望まれる。

(4) 定期試験にリスニングテストを多く取り入れる

授業でリスニングの指導を行っていながら、テストになるとそうした問題が出されないのでは、生徒のリスニングに対する勉強の姿勢も変わってくる。定期試験では授業中培われたリスニング能力を評価できるようリスニングテストを、なるべく多くの割合で入れるのがよいであろう。

7. 最後に

「聞くこと」の言語活動は、英語を聞いて問題に答えるなどのように、ややもすると受身的な活動に終始しがちであった。しかし、これまで見てきたように、教師が積極的に自分の英語を使い、生徒と双方向にコミ

コミュニケーションしながら活動を進めていくことが重要である。また、生徒がまちがったりわからなかった時に、どのような手だてを加え指導していくかが教師のうでの見せどころといえるであろう。リスニング指導では教師は単なるテープレコーダーのボタン押しではなく、生徒を援助しながら指導していくために、さまざまな役割を担うことになるであろう。

参考文献

Anderson, Anne and Tony Lynch (1988) *Listening*, Oxford University Press.

熊井信弘 (1992) 「聞くことの指導」『英語科教育実践講座』ニチブン。
文部省 (1991) 『英語を聞くことの指導』中学校外国語指導資料。

Rost, Michael (1990) *Listening in Language Learning*, Longman.
_____ (1991) *Listening in Action*, Prentice Hall.

Rost, Michael and Nobuhiro Kumai (1990) *First Steps in Listening*, Longman/Lingual House.

_____ (1992) *Progress in Listening*, Longman/Lingual House.

竹蓋幸生 (1989) 『ヒアリングの指導システム』研究社出版。

Underwood, Mary (1990) *Teaching Listening*, Longman.

Ur, Penny (1984) *Teaching Listening Comprehension*, Cambridge University Press.